

故吉田恭爾助教授追悼の記

中村八朗

故吉田恭爾助教授と私が相識ようになったのは、二人が教育研究科社会科コースの新設にもなって同時に筑波大学に招かれたという機縁によるものであり、それは昭和54年4月のことであった。それから以後、まだ四十才台の前半という若さで早逝されるまで、約5年半の同僚としての交際が続いたのであるが、私自身は既に停年まで五指で教えることのできる年齢に達しており私の後は当然吉田君に引継いで貰えるものと思いつけていた。それだけに本年度の二学期授業が開始された直接に同君の逝去を知らされたのは、事前に予想していなかった訳ではなかったとしても、やはり私には相当のショックであった。最後にお会いしたのは、逝去の2週間ほど前に東大病院に入院中の同君のお見舞に行った時であるが、酷暑の時期であったことから蒲団の外に出されていた腕は、マッチ棒のようにすっかり細くなっていた。病室を辞した後もこの腕のことが私の記憶に強く刻みつけられており、病状は既に絶望的ではないかと感じてやり切れない気持ちに襲われていた。

吉田助教授は常に温和で控え目な性格の持主であった。しかし研究に取り組む場合はどんな細部に亘ることででも極めて丹念に、かつ凡帳面に扱う人であり、このことは教官が担当しなければならない学務的な事務にも及んでいた。研究成果に関しては、吉田君は社会福祉を、私は都市を専門にしている関係上、十分に知悉しているわけではないが、私の眼に触れた範囲では、このような性格を反映してか、研究対象にきめ細かく眼を配り、それによって捉えた多くの事実のどれ一つといえども粗略には扱わない点に好ましい感じを懐いていた。

以上のようなことから、強気で物臭な私よりは、同君の方が教育研究科のようなところには適任ではないかと思ったことも何度があった。事実同君になつた院生諸君も少なくともはなかつたようである。したがって同僚の側からは言うまでもなく、恐らく学生諸君の側からも吉田君の死は惜しんで余りある損失であったと考えられる。

本誌には「ふる里意識」の調査結果が収録されているが、この調査は調査票回収までの過程に関しては吉田君が実質的な責任者となって作業が進められたものである。今になって考えれば、当時は病勢がかなり抗進していたのではなからうか。そうとすれば肉体的に苦痛のともなうこと

も何度かあったのではないかと推測されるが、それにもかかわらず予期しない入院のために後の作業継続を断念するまでの間、この調査の推進に当たられたのは凡帳面な性格と強い責任感があったからに外ならないのであろう。教育研究のためにも同君の逝去が悔まれてならないのである。とはいえ、その吉田君を失ったのは厳然たる事実である。聞けば家庭の諸事情の関係上、大学での修学にはかなりの辛酸をなめられたことであり、これからその労苦が酬われようとする時になって亡くなられたのであるが、今となっては神に召された魂のご冥福を祈るばかりである。

(筑波大学社会科学系)

故吉田恭爾助教授の略歴・主要業績

略 歴

1941年8月22日 愛媛県南宇和郡西海町に生まれる。

1960年3月 島根県立浜田高等学校卒業

1961年4月 日本社会事業大学社会福祉学部入学

1965年3月 同大学社会事業学科卒業

1965年4月 現代芸術社入社

1967年3月 同社退職

1967年6月 光文書院入社

1971年3月 同社退職

1971年4月 白梅学園短期大学保育科助手

1974年4月 同上 専任講師

1978年4月 同上 助教授

1979年4月 筑波大学社会科学系助教授

なお、白梅学園短期大学在任中に立教大学社会学部非常勤講師、筑波大学在任中に日本社会事業大学社会福祉学部非常勤講師、東京都児童福祉審議会臨時委員などを勤めた。

1984年9月7日 死去

主要業績

故吉田助教授は多数の業績を残された。それらは目下、同僚・後輩の手によって整理されている途中なので、その一部主要な30編余を掲げる。

著 書

『現代のエスプリ・№142, 母子家庭 — その生活と福祉』至文堂, 1979年(編集・解説)
『老人福祉・家族福祉』勁草書房, 1983年(共著, 本人は「家族福祉」を執筆)

論文(単行本に発表したもの)

「身体障害者問題の構造」(湯沢雍彦ほか編『社会学セミナー3, 家族・福祉・教育』有斐閣) 1972年。

「老人福祉の現状と問題点」(副田義也編『社会福祉の社会学』一粒社) 1976年。

「階級対立の激化と『社会連帯』の擬制」(高沢武司ほか編『社会福祉の歴史』有斐閣) 1977年

「老人福祉法の成立と展開」(吉田久一編『社会福祉の形成と課題』川島書店) 1981年。

「高齢者勤労世帯の家計の動向」(副田編『老年社会学I・老年世代論』垣内出版, 1981年。

「老人ホーム利用者の生活」(副田編『老年社会学III・老齢保障論』垣内出版, 1981年。

「老年期の創造的生活」(副田編『日本文化と老年世代』中央法規出版, 1984年。

論文(雑誌に発表したもの)

「老人ホームの社会学的研究(1)」(『社会老年学№2』, 東京大学出版会) 1975年, 共同執筆。

「老人ホーム利用者の形成過程」(『前掲誌№6』) 1977年, 共同執筆。

「母子寮の現状と将来像」(『母子研究№1』真生会) 1978年, 共同執筆。

「母子世帯の家計」(『前掲誌№2』) 1979年。

「母子世帯の母親の職業と労働条件」(『前掲誌№4』) 1981年。

「単親家庭の生活問題と福祉対策」(『前掲誌№5』) 1982年。

「母子世帯問題の現状と構造 — 東京都における」(『母子福祉・父子福祉の研究』真生会) 1983年。

調査報告

「家計調査」(『交通遺児家庭の生活実態調査』交通遺児育英会) 1974年。

「家計調査」(『交通遺児の教育調査』前掲会) 1975年。

『老人ホーム入所経過調査1』（東京都老人総合研究所社会学部）1976年，共同執筆。
「家計調査」（『交通遺児の母親の職業調査』前掲会）1976年。
『老人ホーム入所経過調査2』，『問題3』（いずれも前掲研究所）1977年，共同執筆。
「交通遺児の教育費」（『交通遺児の母親の疾病と医療』前掲会，1977年。
『老人ホーム入所経過調査4』（前掲研究所）1978年，共同執筆。
「母子福祉の体系に関する研究1」（真生会）1978年，共同執筆。
「家計調査」（『交通遺児家庭の生活と教育調査』交通遺児育英会）1979年。
『老人ホーム入所経過調査5』（前掲研究所）1980年，共同執筆。
『母子福祉の体系に関する研究3』（真生会）1980年，共同執筆。
「家計調査」（『交通遺児の生活危機と生活不安』（交通遺児育英会）1981年，共同執筆。
『老人ホーム利用者の形成過程』（筑波大学）1982年，共同執筆。
「家計調査」（『交通遺児の母親の職業調査』前掲会）1982年。
「大都市の親子関係－東京都新宿区の場合－」（『筑波社会科学研究第1号』）1982年。
『被保護世帯の生活と公的扶助労働の過程1』，『問題2』（いずれも筑波大学）1983年。
共同執筆。

翻 訳

T・パーソンズ「合衆国の社会構造における年齢と性」（副田編『現代のエスプリ・186青年』
至文堂）1974年。